

疑謗を縁に

▷様

御便り有難うありました。真実のみ救いにあつたあなたのお便りは何時も私の胸の底に涙をうるませます。若いあなたが死から生へ、暗黒から光明に、一途に進んで下さることを嬉しく存じます。新年は唯永遠に生きる者、無上正真の白道を精進する者にとつてのみ、無上の意義を存するのであります。この一年をブラブラして何の意義もなく暮す人もあるでしょう。お金儲けだけに使われる人もあるでしょう。今年
は死の悪魔につかれていた人もあるでしょう。万人が万人、様々な日暮しをするでしょうが、はつきりと一筋道を進ませられる私たちこそ真に幸福であります。

▷様

あなたは人一倍過去の罪の深かったことを泣いています。そうしてみ仏の御慈悲の深さに徹底していますけれども、世間は罪の深さに泣いている今のあなたをすらまだ冷たい鞭を以てむち打とうとしています。世間の冷たい人たちの仕草が、またしてもあなたを泣かせます。私は、私だけはいつまでもあなたと共に抱きあつて泣きたい気が致します。あなたはもう罪に目覚めたのです。底知らぬ罪の深さに戦慄して大悲に救済されたのです。けれども冷たい世間は、その仏の子になつたあなたを嘲笑して、「あんな奴が」というのです。あなたはただ涙ぐんで黙っています。そのあなたを尊いと思います。

まことに「われらが身の罪悪の深きほどを知らず、如来の御恩の高きことをも知らずして、まよへる」我等であります。われらが身の罪悪の深きほどを知り、如来の御恩の高きことをも知らば、冷たき眼を以て他人を見るには、あまりに価値なき私であります。

▷様

他人に謗られるということは決して、誇つたことではないのであります。悪かつたからこそ、悪ければこそ、他人にも世間にも誹られるのであります。私どもは誹る人を悪もうとしますが、他人を悪む前に、悪まれる自分の醜さに氣附かなければならぬのです。悪まれ誹られた時、私どもは、自分の胸を越えて悪む人のみを見ようとしませんが、それは徹底した心の眼が開けないからであります。

▷様

けれども誹られた時、ただ自分を見て泣くだけでは自分を知つた人ではあつても救われた人ではないのです。冷たい世間に口きがない人たちに語られて泣くあなたの胸の裏には、み仏の声は聞えませぬか、聞えませぬか、聞えませぬか。人はともすれば他人にほめられたり、尊ばれたりする時には有頂天になつて、自分を見失つて、空虚な自分になつてしまひやすいのです。眼が外に走つて内なる生命を見失うことはあさましいことでもあります。

むしろ極悪最下の泥凡夫は、謗られるがままにそしられて、静かにみ名の内に生きて、生命たる如来を見失わずに生きてゆくこそ、一番相應しい生活でありますまい

か。親鸞聖人は「ただ仏恩の深きことを念じて、人倫の嘲りをはずす。もしこの書を見聞せんものは、信順を因となし、疑謗を縁となし、信樂を願力にあらわし、妙果を安養にあらはさん。」とお教え下さいました。内なる信心、如来による信念を因として、幸運や称讃を御縁によろこべとはおおせられずに、疑いや謗りを縁によろこべとおっしゃいます。

けれどもこの御文の心持は決して、「お前たちには信念がないのだ、信仰がないのだ。自分だけの信仰が、お前ら目覚めない者にわかるものか。」こうした大それた自惚から出た、高慢であつてはならぬのです。もつともつと謙虚な、私たつた一人が一番の悪人と知れた者には、そんな気持ちは見られないはずなのです。世間の謗り以上な悪人なのです。それがどうしてそんな高い頭が出せましようぞ。信仰を因に、世間の謗りを縁によろこべとの御意は、罪の深さに目覚めて如来によつて生きる者の心の内なる風光です。世の中から謗られつつも、内なるよろこびにかえるのです。言いわけもいらねば、説明もいらぬ。私のみは無言のまま如来によつて歩ませてもらうのです。そしられる中に、泥凡夫のままが、厳肅なひきしまった気持ちで生きさせてもらうのこそ、相応しい嬉しい天地ではありませんか。

△様

私どもは兎角、地獄一定者とはいいつつも、自分を忘れて他人の悪いことばかりに目を注ごうとします。どうしてこれが徹底せる罪惡觀でありましよう。悪人ほど自分を高く買おうとします。悪人ほど他人の罪惡を言おうとします。悪人ほど自分を善人と思つています。悪人ほど自分の欠点に気がつきませぬ。悪人ほど自分を物わかつた人間だと思ひます。だから悪人は他人の忠告を素直に受けたり、教訓に従つたりすることはないので。昔から「女子と小人」を養ひ難いものにしてはいますが、小人は決して他人の親切な忠言などは耳にいらぬのです。耳にさからう言葉の内にも尊いある物を見出したりすることは出来ないのです。愚痴深い固意地な妻に亭主が色々不心得を言つています。妻は一言一言にさからつてついには怒つてしまひます。けれどもこれが私どもの心の内なる有様でありますまいか。人は年寄になればなるだけ、こうした我慢が強くなり、純なる魂を失えば失うだけ、教えられる資格のない者になつて来はしますまいか。どんな悪人でも、どんな悪を働いた人でもきつと心にはまだ言いわけしたい心持ちと、「俺はいいんだ」と不平を言いたい気持ちが残つているそうです。まことに私どもの心を見つめる時、これが久遠の迷執ではありませんか。

△様

「俺は善いのだ」この考えは正しくはないのです。これこそ徹底的な悪人の証拠なのです。あなたが如来を信じながらも、世間から嘲笑の的となり、苦しまねばならない時、「俺は正しいのだ。」その高慢さで勢いづけてはなりません。それは如来をはなれた心ではありませんまいか。否、私はその「俺は善いのだ」というどうにもならぬ心を見つめて泣いています。

△様 あなたは、そしられる下からも、このお慈悲を一人でもいいから知らせてあげたいと念じていられます。そうしてそれがあなたの言葉や行になつて出て来ます。

世間の人は「あんな悪かつた奴が」と言つてそしります。けれども一度この道に入つた者が、共に法喜を分かちたいとの念願が燃えて来ることは当然のことです。報謝ということは出来難いことでもあります。

報謝せんとする心は尊い心であります。権利義務の冷たい日暮しから、報謝の生活に変わった時、人は始めて生きたのでしよう。けれども報謝はなかなか出来るものではないのです。深い深い自分どもの魂の奥底にふれて行く時、恩の深さがわかれば、わかるだけ、一向報謝していかない、否一步も報謝の足の進まぬことに気づくのであります。「俺には報謝が出来た」との思いはもう墮落した気持であります。たとえ親を千里の遠きに背負つて高恩を報じても、全く孝行者たる意識のない者こそ、孝の第一義に徹底した人であります。真実の報謝は、つとめつくして、人間の全部を捧げても猶、足りないと思うところに湧いて来ます。

▷ 様

ある人は、「報謝どころか、私は私の道を求めることがもつと急しいことだつた。」と言いました。私はこの言葉について深く考えさせられました。そうした言葉を使う人が、ではどれだけ急しく自分の道を求めているだろうか。否、私たちはよくこの人と同じ言葉を使おうとします。けれどもともすれば、道も求めない閑だらけの自分をこの言葉でごまかし、眠れる日暮しの言いわけにさえしているのです。もし真実にこの言葉通りの方があるならば、それは尊い人なのです。自らの求道を棄てておいて、道を求めつくした者の如く人の御世諸に夢中になることは、それは第二義に墮落した日暮しでありましょうけれども、道を求めることと報謝とは反対の二つの道ではないのです。道を求めて求めて進む者たちの、それ自身の生活が社会に交渉をもつ時、報謝の日暮しであります。報謝しようとする意志のないことと、報謝の出来た者だとの二つの考えは、どちらも正しいとは言えないと存じます。つくしてもつくしてもつくしきれないとほんとの道が開けるではありませんまいか。かくて私どもは報謝しなければなりません。そして一生かかってもついに報謝は出来ぬのです。

▷ 様

一人の人間が信仰に入ることとは人間最後の解決であります。至高のレベルに入ることでもあります。一人の人間に仏が信じられた、一人の人間に仏と一体なる自覚が出来るに永遠に生きる道を体験したという事実は、あまりに広大な荘嚴な事実です。人間最後の解決であり、最高の智慧にふれた者であります。従つてそう易々と、誰も彼もが、活動写真の見物のようにゾロゾロと入り得るものでありましょうか。

まことに信仰は瓦礫を変じて金となすものであります。信仰生活に入るためには如何なる高い価が支払われてもいいのです。どんなものを以てしても信仰を買うべき尊いものはないのです。自覚なさいませ。

▷ 様

救済の体験は、安価なる楽家にはありません。仏も神もいらぬはずよ、彼はあまりに泡沫のような幸福の持ち主です。彼の内に仏のみ名が生れないはずよ。彼は人生の苦をあまりに知らずに生きてきた。人間の内に潜む苦悩の真相を見る智慧がないのだ。救済もいらぬはずよ。彼はあまりに彼を善人と考えている。

阿弥陀仏は人間苦の内に生れたもうた煩惱泥中の蓮にてまします。血みどろな流転輪廻の宿業の内に招喚の叫びをあげたもうたのだ。されば、人間苦の血みどろな、溶鉢炉の中に入れられて煮られた時、そこに雄々しくも、彼は炎王光仏として燃え上りたまひ、地獄の火中に招喚の勅命たる名号の叫びをあげたもうたのです。

人間は一度、底ぬけの苦悩をなめて来た方がいいのだ。血みどろの自分を見出して来た方がいいのだ。あなたは今も、やはり泣いています。眞実金剛の信念は、そのあなたの胸の内に試練されています。淡い法悦も消えた、描いていた信後の生活も消えた。ヒシヒシとせまる涙を抱いて、どすぐろいあなた自身を見つめて、そこにあなたの魂の故郷は見出されますか。念仏はありますか。合掌することが出来ますか。かくて語る者よりも、誇らるる人の方が苦しくても幸福であります。順逆共に御縁であります。

▷様

目覚めない人間が千人集つてもそれは要するに烏合の衆であります。私どもも烏合の衆の一人であります。けれども如来大悲は痛ましいほどのこの無自覚を知らせて下さったのです。

浅薄なものの考え方をする人は、悪人が救われることを嘲笑います。けれども悪人一人が救われることは善人千人の救いよりも社会を浄化します。悪人こそ救われて、善人にまで及ぶのです。如来は悪人正機と呼びたもうてあります。私どもは思いをひそめて如来慈涙の根源に遡らなくてはなりません。そこには絶対の宿業力を見ます。絶対の宿業力の内に燃えたもう金剛力を見ます。まことに如来と私とは二つに4分裂してはいなかったのです。二つのままが一つになつて一つの道をつきすすんでいたのです。

世の中の平凡人があなたを見て嘲笑うでしょう。けれども平凡人は、彼らの仲間から一人の先駆者が出ようとするとする時、暴力によつてでも、それをひきとめようとしません。けれどもどまつてはならぬのです。いい加減な日暮しに死んでゆく人々のために眞実の足どりをくくられてはならぬのです。あなたはあなたの道を精進なさいませ。金剛力はあなたのものでありませぬか。高ぶらず、てらわず、高あがりせず、しかも動かぬ信念の一道こそ、あなたの足下に開けています。

私はあなたにこの一文を捧げます。時はたつことがあまりに早い。今日一日の充実こそやがて永遠への充実である。

来りませ慈悲のみ園に

新聞紙を開いて見ると、年の暮れも年の始めも、人間の罪の記録で充ちていないか。どの頁もどの頁も、人間の生血で染められているのを見た時、何で涙なくして読まれようか。

何時のほどからか、私の心の底は涙にみちて乾く時がない。うるむ心を抱いて、悲しい出来事を読む時はもちろん、温い人に会っては泣き、冷たい人に会っては涙ぐむ。又しても又しても涙の子のみが私のもとを訪れて下さる。人の子は心ゆくばかりどこかで泣きたいのだ。出づる涙のありつたけを流して痛む心を癒す所がほしいのだ。

一生を涙なくして暮せる者があるだろうか。けれども冷たい世界に生きておれば人の涙は凍るのだ。そしてそれになれて来る。人の子の心の底の涙が枯れてしまった時、そこは淋しい。沙漠のように荒んだ世界を誰が好もうぞ。嫌だと知りつつ何時か荒んで涙さえ流れない。

人は皆、愛に輝く人格の前で、心の底の泉を掘り下げたいのだ。温くうるむ心になりたいのだ。まことに愛に輝く人格は火鉢である。万人の火鉢である。

汝は、世間に不幸なる罪悪が行われた時、冷たい眼で見えて通りはせぬか。「仕方のない奴等だ」と身の程も忘れて、さも善人らしく冷やかにながめ下してはいないのか。

六道輪廻の旅に疲れ、人間苦に悩まされた哀れな兄弟たちに、何でこの上鞭うたれようぞ。人間と自然との激しい争闘につかれた人たちに一番欲しいものは、安らかな憩いではないか、安息ではないか。哀れな疲れたる兄弟たちよ。来りたまえよ慈悲のみ園に。阿弥陀仏こそ御身たちの安らかなる安息のみ胸よ。

血みどろになつて斃れんとする兄弟たちに、人間苦になやみたもう兄弟たちに、何でこの上修養がとかれようぞ。人は修養では救われぬ。理論に飽き、道理に中毒し、理想の破れた兄弟たちに、何で無味乾燥な哲理が間にあおう。

来りたまえ慈悲のみ園に、御身の心霊に火はつけられよう。情の狂ふがままに、恐しい罪を犯してしまった人の心は、法律を以て罪することが出来、罪の報いの恐しさを知らせることが出来よう。けれども法律の力で彼を救うことは出来ぬ。彼を救う力は法律の中にはない。審判の席にはない。

ただ彼を救う力は、彼の上に注がれた涙の力を持つてのみだ。君は善人たらんとしつつも、内から動く宿業の力にもろくも罪悪の奴となつて、冷たい因果の鉄則の前に監獄の囚人となり、新聞の三面記事にさらされたのだ。何も思はぬ考えぬ世間は、罵りと嘲笑の弓矢をとつて猶も君を追撃するだろう。君は猶痛ましくも戦おうとするか、自暴自棄の酒によつて、哀愁の涙を消そうとするか。来りたまへよ久遠のみ座に、かえりたまえよ心霊の故郷に、大慈大悲の親里へ。

三千年のその昔、王后韋提希は、十悪五逆の罪洵と怨憎会苦の人間苦にやつれた身心を釈尊の前になげ出して、まんまと救いとられたではないか。

「唯願わくば世尊、我が為に広く憂悩無き処を説きたまへ。我當に往生すべし。閻浮提濁惡世をば樂わざるなり。この濁惡処は地獄・餓鬼・畜生盈滿し、不善の衆多し。願わくば我未來惡声を聞かず惡人を見ざらん。今世尊に向いて五体投地し求哀懺悔す。唯願わくは仏日我を教えて清淨業処を觀ぜしめたまへ。」

一生を営々として、子供のために、家業のために、炊事のために使い過して、しかも何物をも報いられずして徒らに老い弱つて愚痴や不平で灰色のまま死のうとしてゐる姉妹はないか。来たりませ。大悲の園に。大悲は惡人女人を正磯と呼びたもう。

もし全人類がもつと温い心を持ち合うことが出来るなら、罪惡の記録は減るだろう。まことに罪の子は、冷たい家庭や社会に造られてゆくのだ。一切衆生の業苦なのだ。

自分の魂を見つめた時、どんな恐しい慘劇の中に出て来る人物の上にも自分を見出すことが出来るのだ。私の内なる恐しい惡魔のようなささやきが、そのまま何かの惡縁にふれて培われたら、どんな事件をおこすかもしれぬ。そうした恐しい心の芽を冷たい世間で太らすからこそ、罪惡の悲しい出来事が生れるのではあるまいか。

尊い自分を冷たい世間に棄ててはならぬ。来りませ。温き大慈大悲の春の園に。一切衆生悉有仏性、み胸にやがて信心の華開けて、如来誕生まします。

おい同胞。永遠の大生命にさおさして、生き生きてゆく我等じゃないか。

単純な眼で世の中を眺めてはならぬ。複雑なる宿業の力で、痛ましい罪の人を眺める日があまりに恐しすぎはせぬか、鋭すぎはしないか。あまりに冷たい我等の仕業。せめて同情の涙を注ごうではないか。如何に荒んだお方でも、愛にも慈悲にも感じない人はないはずなのだ。

念仏は人間最後の解決である。濁れる心が如来の悲涙に洗われて、永遠に力強く立ちあがったのだ。念仏によって心の底には泉が湧く。荒んだ目で世間を見れば世間も亦荒んで見えよう。愛にうるむ眼を通して疲れきった世間を見れば、何で悲しまずにいられようぞ。寒の日の夕の街は忙しい。様々な人が様々な方角に動く。我が心の眼には涙がにじむ。

弱い者にほしいのは力じゃないか。来りませ。聞きませ。易行の他力。本願一実の白道はおん身の前に開け、如来金剛のみ力は、あなたのもではありませんか。南無六字の靈火が、煩惱の胸底に、感激の心頭に燃えあがる時、あなたはついに力の人となり得るのだ。阿弥陀仏こそ弱き者の力づけられる金剛のみ胸よ。